方向

七

方向社
京都市上京区下長者町通千本西
1957年6月20日

瓶花

袁中郎私記　二

原田憲雄

一

万暦二十七年（一五九九）の春、袁宏道中郎は、友の李子髯元善に答えた手紙に、『瓶史』の稿の成ったことを報じている。

……近ごろまた『瓶史』十三篇を著す。『瓶史』は、瓶花の目と説とを記すこと、陸羽の、『茶経』、范成大の『牡丹志』の類のごとし。……①

文に明らかなように、『瓶史』とは、瓶花、すなわち瓶に生けるに好い花、の名を列挙し、あわせて、その生け方などについての意見をのべた、エッセエである。中郎が、なぜこのようなエッセエを書いたか。『瓶史』のまえがきは、その事情を、次のように記す。

それ、幽人韻士は、声と色とを屏絶す。その嗜好、山水花竹に鍾らざるを得ず。それ、山水

花竹なるものは、名の在らざるところ、奔竟の至らざるところなり。天下の人は、濫濫列列に棲止し、日は塵沙に紛み、心は計算に敝る。これを有たんと欲して、暇あらざるところあり。故に、幽人韻士は、間あるによりて、陪まりて、一口のおのが物となすことを得るなり。それ、幽人韻士なる者は、不争の地に処り、一切をもって天下に譲る者なり。ただ、かの山水花竹は、人に譲らんと欲すとも、いまだ心ずしも受くることを願わず。故に、これに居るや安らかに、これに陪まるや禍なし。ああ、これ隠者の幸なれども、決烈たる丈夫の所為なり。われ生平より企て羨みて、しかも必ずしも得べからざる者なり。幸いにして、身は隠るると見わるるとの間に居りて、世間の趨るべく争うべきもの既に到らず。われ遂に、筆を高嶺に故だて　繻を流水に濯がんと欲するに、また卑き官のために絆がる。僅かに、花を栽て竹を種うるの一事ありて、もって自ら楽しむべきに、邸居は湫隘にして遷徙すること常なし。やむを得ざるにより　乃ち、膳瓶をもって花を賛え、随時に挿し換うるに、京師の人家に有するところの名卉は、一旦にして遂にわが案頭の物となりぬ。折易し流頓する苦しみはなくして、味わい賞ずる楽しみあり。取る者は貪らず　惜う者は乎わず　これ越ぶべきなり。ああ、これ暫時快心の事なり。狂れてもって常となして、山水の大楽を忘るることなかれ。石公これを記す。凡そ瓶中に有するところの品目は、後に條列し、諸もろの好事にしてしかも貪しき者と、これを共にせん。②

中郎が理想とする人間のタイプは「幽人韻士」とよばれるひとである。幽人韻士の、他のひと

と異なるところは、生存競争のはげしいこの世にあって競争を事としないところにある。いわば落伍者たることを、自らの意志によって選択し、落伍者の境涯にその安住の地を決定したひとである。その点では、出家者と極めて相似ている。けれども幽人韻士は出家者ではない。幽人韻士が出家者と異るところは、これが、一切の欲望・嗜好を捨離しようとするに反し、かれは、必ずしも欲望・嗜好を抛棄しようとはしないのである。

幽人韻士もまた、欲望嗜好の満足を求める。ただ、その満足を求める過程で争いの発生することは、かれが極力さけようとするところである。もし二者択一の岐路に立つならば、欲望・嗜好の満足を捨てても争わないことの方を選ぶであろう。

幽人韻士は世の人の争い求めるものをすべて世の人に譲ったのち、世の人の求めないものを見出して、これにおのれの嗜好をあつめる。幸いにして、これこそ幽人韻士の境涯に最も適したもの、山水花竹であった。

幽人韻士は山水花竹への耽溺におのれの性命を見出すひとである。対象が山水花竹であろうと、すでに耽溺におのれの性命を見出す以上、幽人韻士は顛狂のひとといわざるをえない。顛狂は退歩をめざすゆえに、その相貌は一見消極ととられようが、実はよほど剛毅のひとでなければ到りがたい境涯であることは、前稿「顛狂」にのべた。幽人韻士の山水花竹への耽溺も、隠者の幸にすぎぬといえばそれまでのことながら、決烈たる丈夫でなければ、そこに徹底することはできない。

中郎はみずから顛狂たることをねがったひとである。そのひとが、ひごろ、幽人韻士の耽溺を

「企て読む」ことは当然であった。だが、おのれをかえりみるとき、そのことの「必ずしも得べからざるもの」であることが、まず自覚せられる。

『氣史』を著したとき、中郎は数え年の三十二歳、すでに『微波』『幽風』『解脱』『廣陵』の四集によって、「性靈説」すなわち、思ったことを思ったように書くという解放的な方法論をかかげ、清新な詩風にこれを実践し、明一代を風靡した前後七子の復古主義を打倒すべく、めざましい活動を展開していたときである。その颯爽たるアヴァン・ギャルドの風丰と、幽人韻士を企図して必ずしも得べからずとする言葉とは、そぐわぬようにも受けとれる。

だが、ゆらいアヴァン・ギャルドの運動というものは、文学史の上で回顧せられるときにのみ花々しいのであって、運動の当初は、ほとんど世間から黙殺され、精々のところ「若い者の無まぐれ」程度にしか見られないのが常である。アヴァン・ギャルドの用語が戦闘的に尖鋭で、その表現が人目をそばだてるほどに奇矯であり勝ちなのは、むしろ戦士の悲戦苦闘を哀訴するものにほかならない。中郎を中心とする公安派が、擬古派を追いのけるほどに流行するのは、「性靈説」の合理主義が世人に受けいれられたためというよりも　後に中郎が高等文官試験の試験官となって、受験者の成否が中郎の文学上の方法論とかかわりがあろうと、世人から憶測せられた結果、と考える方が、当時の実情に近いように、私には想像せられる。「幸いにして身は隠るると見わるるとの間に居る」という中郎のことばは、隠者としても、有名人としても、世の視聴を集めるにはいたらない当時の彼としては、だから、必ずしも謙退の語としてでなく、事実に近いものとして受けとっておいてよいであろう。世間の関心を集めないようなものは、その行動につい

ても注視せられることはないのだから、なにをしてもいい自由がある。そこで幽人韻士に倣って、山川に放浪しようとすると、一つの障碍にぶつかる。「卑き官に絆がる」がそれである。中郎は、万曆二十五年五月の正月、ほとんど逃亡せんばかりの決意をのべて、やっと兵部の県令の職を解かれ[14]、解放のよろこびのうちに、西湖・五泄・天目など、天下の景勝を遍歴したが[15]、翌二十六年、すなわち『瓶史』を著す前年四月に順天府教授となり[16]、今の北京に寓居を構えているのである。

官に絆がれても「花を栽て、竹を種うる」ことくらいなら楽しめるはずだが、相憎、僧家住いで、庭といっても猫の額ほどもない。だいいち、官吏には転任がつきもの、むかし、何気なしに、六百貫の薪を買えと命じたばかりに「今日あって明日知らぬ役人の身で、薪を六百貫も買いこむんだそうな」と陰口きかれたひともあった[17]。だから、やむをえず、瓶花に僅かに渇を医やそうとするのである。

しかしながら、瓶花は、あくまで「暫時の快心事」にすぎない。瓶花の安易に狂れて「山水の大楽を忘るることなかれ」

『瓶史』一巻は、いまのことに移していえば、ギャグといっていいような要素さえ満えるほどに、明るく、スマートである。この明るさと、スマートさとが、後に林語堂を魅了し、その手で『瓶史』が欧米にまで鼓吹せられることになるのでもあろう[18]。

だが、明るくスマートな表皮を一枚剝がすと、そこには苦渋な告白があるように、感ぜられる。「山水の大楽」を理想としながら「瓶花」に満足を見出さなければならないひと、として、おの

れを規定するところに、その苦渋の告白を見るのである。

中郎は、北京在住時代の書斎を「瓶花斎」と名づけ、『瓶史』を著した前後二年間の詩文を集めて刊行したときにも、その題に『瓶花斎集』を選んでいる。この二事もまた、わたくしの推測する告白と関わりがあるように思われる。だが、この推測は、中郎の生涯をつぶさに討尋することによって、その当否が検せられねばならぬ。ここではまず、彼の家系と、それが彼の文学に及ぼした影響についてさぐってみよう。

二

袁氏は代々武人の家柄で、江西省の豐城に住んだ。

十五世紀の初ごろに、袁有倫という人があった。「有倫」は諱ではなく、字であろうと思われる。この人が、湖北省の蘄水に出仕することになったとき家を同省の公安県長安里に移した。この有倫が、中郎の高祖父であり、以後、袁氏の族人は「公安の袁氏」と称するのである。

有倫の子、すなわち中郎には曾祖父にあたる瑛は、処士・官にはつかない人、であったが、武勇のひとで、常に軍服を着け、剣を帯び、悍馬を乗りまわしていた。正德年間（一五〇六―一五二一）に天下が乱れ、湖湘地方に群盗が起った際、里中の青年を集めて白衛隊を

組織し、賊を長安里によせつけなかった。たまたま数人の下男をつれ、騎馬で郊外に遊んだとき数十人の賊徒にとり囲まれたが、下男を指揮して賊徒を叢田のほとりに殲滅したことがあった。[12]

また、飢饉の年には、粥を煮て、飢えに苦しむひとたちに振舞い、おかげで死を免れるものは数しれなかった、という。まことに「隠にして豪侠なる人」であった。[13]

このひとの世代までは、袁氏のひとは、中郎の弟の中道小修がいうように、一介の武弁にすぎなかったから、家の記録をとどめることを知らなかった。従って、この人の[illegible]字も業績も、書き遺されたものはなく、中郎兄弟がその祖母余氏から聞いた話によって、わずかにそのひととなりが彷彿せられるのみである。[14]

袁氏が公安でやや名を知られる家となるのは、瑛の子すなわち中郎の祖父の大化の世代に至ってからである。大化は字を左渓といい、正徳八年癸酉一五一三に生れ嘉靖三十八年戊午一五五八に四十六歳で死んだ。中郎が余氏から聞いたところによると、左渓もまた、その父の気象をうけて、義侠のひとであった。[15]

嘉靖二十三、四年のころ、里人に貸付けた元金は千両、五歳は一万石に上っていた。左渓は人人の苦難を憐って、借用証書を全部焼却する。里人の苦難はゆるめられたが、袁氏の家運はこれがために衰退する。[16]

左渓について更に注目すべきことは、彼が子弟に章句を授けたこと、[illegible]そうしてその教育法の優秀さが、里中で最高とされたことであろう。武弁の家袁氏が、ここで初めて、

文学とゆかりを持つ。　　左溪の播いた種は、またたくうちに、大きな果実をもたらした。まず、花溪の子、すなわち中郎の父の世代には、諸生、官立大学の学生、に選抜されるものが出た。ついで中郎の世代になると、万曆二十九年辛丑一六〇一までに、高等文官試験に首席で合格するもの一名、朝廷に籍をおくもの二名、高等文官試験の第一次試験合格者一名、大学に学ぶものは四十人をこえた。[17]

だが、これらのことも、中郎を中心とする公安派の成立にくらべれば、あるいは言うに足りないことであったろう。

左溪には夫人が四人あった。第一夫人は丘氏？―一五五〇　第二夫人は余氏一五三一―一六〇一　第三夫人は詹氏一五三二―一六〇一　第四夫人は舒氏一五三二―一六〇五で、第一夫人は嫡妻、第二夫人以下は妾である。丘氏と余氏とには、いずれも一女一男があった。余氏の男子が中郎の父である。詹氏と舒氏とには、子女はない。[18]

中郎は、余氏・詹氏・舒氏のために、それぞれ墓石の銘を撰んでいる。丘氏に対してそのことのないのは、その死が中郎の出生に先立つためである。けれども、仮に丘氏の没が余氏らのそれと相並び、中郎が墓石銘をつくる任に当ったとしても、余氏らの場合に示したような愛情をそこに籠めたとは、考えられない。中郎は、丘氏とその子らに対して冷淡であった。いな、むしろ苦酸な感情をもってこれに対したというべきであろう。余氏の墓石銘には、それがあらわである。更に、中郎が丘氏の男子のためにつくった墓石銘に至っては、生者に対してならばともかく、死

者を葬る場合には　他のひとならば現わすことを避けたであろうような、その人に対する感情を、忌憚なくぶちまけている。

これら墓石の銘は、中郎のその家族に対する感情を読むうえに欠くことができないだけではなく、家族の諸関係を明らかにするにも重要な文章であるから、敢をいとわず摘録し、説明を加えてゆこう。次に引くのは「余大家祔葬墓石銘」である。「大家」は「大姑」であって祖母を指す。

大姑が邑の先主営に生れしは正徳乙亥の歳、十月廿なりき。長じて衰に皈ぎぬ。嫡姑丘の祭なりしかば、艱難辛苦、備さにこれを嘗めぬ。大姑は怡然として色に忤うことあらざりしなり。戊戌に長姑を挙みぬ。己亥には丘もまた二姑を挙みぬ。甫に数月なるのみ。長姑の乳を釈きてこれに乳しき。癸卯にわが父を挙みぬ。甲辰には丘もまたわが叔を挙みぬ。甫に数月なるのみ。わが父の乳を釈きてこれに乳しき。

旧中国では、男性が数人の妻をもつことは普通であった。その数人の妻は、同じ家に、部屋を分って、住む。第一夫人が主婦として家政をとりしきり、第二夫人以下は、第一夫人の指揮下に、家事に、従事する。同じく妻といっても、嫡妻と庶妻とは、主人と使用人ぐらいの関係に立つ。従って、嫡妻の性格によって、庶妻の待遇は著しく上下する。夫は時として庶妻の待遇をあわれに思っても、妻たちのことは妻たちの間で処理させるのが不文律である。中郎もその一部を看ていた当時の小説『金瓶梅』を読めば、それらの消息は明らかである。

袁家の病妻丘氏は、おのれとおのれの子に対しては極めて寛容であったが、庶妻に対しては甚だ「厳粛」であった。家政の実務[illegible]を厳って、ことごとく庶妻にゆだねたが、庶妻がそれをおろそかにすることは、容赦しなかった。余氏らはつぶさに「艱難辛楚」をなめたのである。『金瓶梅』の潘金蓮のような悍婦ならば、その厳粛に対して、あらわに、あるいはひそかに、別の辛楚をもって酬いたであろう。余氏は、そうではなかった。常ににこにことして、不満の色を見せることはなかった。[illegible]多分、叅氏・舒氏に向けられた嫉をもおのれの背に受けて、彼女たちを庇ってやったのであろう。

七溪の子は、まず余氏にめぐまれた。嘉靖十七年戊戌（一五三八）に生れた女子で、中郎が「長姑」とよぶひとである。十八年己亥に丘氏に女子が生れた「二姑」である。ついで二十二年癸卯（一五四三）に余氏に男子が生れた。中郎の父の七沢である。二姑と少溪とは申し合せたように、その出生は長姑・七沢に数ヵ月おくれるのみであった。余氏は、おのれの腹を痛めた子への授乳を中止して、おのれに辛楚を加えるひとの子に、乳房をふくませ、その生着をぬい、むつきを洗う。[illegible]

庚戌のとし丘大姑は卒りぬ。王父、これに家政を委ねるに、二孫を撫して絶痛す。二姑を飯がしむるや、長に先んじ、その奩を倍にす。紙ぎしところの家は儒にして貧し、姑はこれに資給すること十余年なり。後に二姑の病むに、姑はこれを念いて食を絶つに至る。ある日、晨起に、鳥ありて、姑の懐に入り宛転して死しぬ。姑の慟哭して、いまだ声を絶たざるに、訃至りぬ。その至性かくのごとし。

嘉靖二十九年庚戌（一五五〇）に丘氏が死ぬと、王父、すなわち祖父の左溪は、余氏に家政をゆだねた。

余氏は才一夫人の位置を戴ったわけである。だが、余氏は、おのれに加わる辛楚の絶えたことを哀ぶよりも、生母を失った二児の不幸を哀れみ、　　以後、その母に仕えたと同じうやうやしさで丘氏の二児を奉養する。

同じ左溪の子で、年は下でありながら、丘氏の女は余氏のはからいによって、余氏の女よりも先んじて結婚し、婚家に携える荷物も余氏の女に倍する。更に二姑の夫とする人は、太守の弟にあたる王槩という人であったが、儒生で家計が豊かでない。余氏は二姑の台所の苦労を思って、十数年間、仕送りを続けた。これが一片の義理を思うはからいに出たものでないことは、二姑の臨終時の余氏の態度に明らかであろう。

第三夫人魯氏の墳記銘にも相似た記述がみえるが、後に触れることがあるので、ここには省略する。次に引くのは、丘氏の男子、中郎の叔父のために書いた「少溪長公墓石銘」[21]の全文である。

叔なる少溪公は、諱は士玉、わが父の封公と同じく王父左溪公より出で、母は別れり。七歳にして冢母（はは）の丘を失い、封公の母なる余大家を母とす。

「冢母」は嫡母である。「封公」とは、中郎の兄宗道が右春坊右庶子兼翰林院侍読となった因みに、七次が「翰林院編修」に勅封されたため、中郎らがそのひとをよぶとき「勅封された公」

との意をこめて、そういうのである。なお勅封とは、子が貴顕の官職にあるとき、その子の請願によって、その父に一定の官職の名称のみが勅賜されることをいうので、やや不倫なたとえながら、名誉学士院会員というたぐいである。

弱ぎときより弄を好み、瓦注を挾えて里閭に走り、酒後耳熱すれば、弾ちしところの雀を出してこれを炙り、遍く諸もろの年少に啖わしむ。王父はかれを愛しみ憐みたまいしかば、かかることも禁むることはしたまわざりき。

一方、余氏の子の七沢は、早くから父母のもとをはなれて少年塾に入る。汴三夫人の眷氏が百方苦心をして、朝に夕に、くだものや菓子をおくってやるのだが、このあわれみがなければ、七沢は母の愛に飢渇したであろう。

十五歳にしてちちを孤ないぬ。封公はただ一歳を長ずるのみなるに家政を任ねられ、しかして公の姨侯なることは故のごとかりき。

左溪が没した嘉靖三十八年には、七沢は数え年で十六歳、少溪は十五歳であった。一歳長ずるとはいうものの、まことは数ヵ月に過ぎないのに、七沢の肩にはずしりと家政の重任がおちかかって来た。少溪はあいかわらず、日々遊びまわることに忙しいのみである。

性、馬を癖み、厩の中なるはみな良駒なり。高き貴を慢ぶ、言ることは肯ぜざりき。くるひとあるも
致くにもあらず、但だ日びに湖のほとりの葦わらの間を馳しらせ、髪鬣を風にふかせ霧になびかせ、さながら龍の種のごとくなるを望み、蹴蹄をふみ、背を噛み驕ぶり嘶き、鼻を諧すを、観てもって快となしぬ。いまだ雛も鳴かぬに輒くも起き、掃妹い衣冠え庭中に立ち、臧獲に命じて駒を牽き出し、然松もてこれを照し、その芻秣に飽うるか飽らえるかを視て、しかる後に放ち、晩には山の頭より、塵あげて飯りゆくを望み、齒を撥せて笑いぬ。ひととなりは魁ましく碩え、たけ長く悍しげにて、壮んに飲み食らいぬ。日びに秘璽を携え、偏いは五水を提げ、諸客を挾みて、劇飲晝夜を徹すること四十年も一日のごとく、いまだ嘗て一刹も公私に奔走して人の間の労薪の事をなすことはあらざりき。

袁氏はもと豊かであったが、前にも述べたように、左溪の晩年、慈舎のことから家勢はたちまち衰退した。左溪が歿すると、あとにのこされたものは、かよわい女と、まだひとりだちせぬこどもばかりであった。そのような家庭に育って、少溪はなんのはばかりもなく、馬の蒐集や賭博に耽りつづけたのであった。「五水」とは博具の一種である。

公は嘉靖の甲辰に生れ、年を享くること六十、子四人、孫十一人、癸卯の十一月二日をもって、鳳山の原に附葬し、丘始の鎬を分って、これに封ず。左はすなわち先妣王父と余大妣となり。

少溪の子四人、孫十一人の育成もまた、余氏と七沢とのいとなみによったのである。癸卯は万曆三十一年で、ときに中郎は三十六歳であった。

叢祠であったひとと、辛庭をなめたひととは、生きて一つの家に棲んだ。死んでなお一つの墓地に共に棲む。鬱々たる墳墓の間に立つとき、中郎には、それが紫苔を背負って生きねばならぬ人間たちの幻と見えたであろう。

まさに終らんとするに、銘せんことをもってわれに属しき。姪なる宏道、乃ち管を搦り叙敬して、これがために銘す。

さて、そのような叔父が、何を思ってか臨終に、甥の中郎にむかってこういった。

「おれが死んだら、墓石の銘は、ひとつ、お前が書いてくれ」

さまざまな感情がいりまじって、それでもさすがに、筆をとろうとすると、思わずこみあげてくるものがあった。

むかし、晉の支遁道林がつねに数匹の馬を飼うのをみて、人が「僧の身で畜類を飼うとは！」と非難めいた口吻を洩らすと「わしは、畜類を飼うのではない。あの神駿を重んずるまでじゃ」

同じ時代の孫綽子荆は才人であった。才人というものは諧に対してもなかなか感心することはないものである。ただひとり　王濟武子には、心から敬服していた。その王濟が死んだ。会葬者

は当時の名士ばかり。そこへ遅れて孫子荆がかけつけた。霊前で慟哭する。両者の交友を知る人びとは、みな、しんとして涙を誘われる。やがて子荆はいった。「武子くん、きみは、ぼくの、ロバの鳴きまねが、好きだったね。最後にひとつ、聞かせてやるよ」そういったかと思うと、「ヒヒーン」とやった。体つきも、声も、そっくりである。思わず、居ならぶ客が　ぷーッと吹き出した。子荆はやおら頭をあげると云い捨てたものである。「きみらのような連中が生き残って、このひとは、死なせてしまった。

子荆には、おのれの才をひけらかして、かえって人から見下げられる傾きがあった。

黔という土地にはむかしからロバがいなかった。好事家が連れて飯って山べに放ってみた。虎がこれを見つけたが、むくむくとしてえたいの知れぬ大きな獣である。林の間からのぞいていると、ロバが鳴いた。虎はびっくりして、自分を食ってしまうのか、と思った。だが、そっと近づいてみるのに、それほど大した力もなさそうだ。ますます近づいてじゃれてみた。ロバは腹をたててぽんと蹴った。虎は喜んで「はは、こいつにできることはこれだけなんだな。それから、乗びかかって、食ってしまった。こんな寓話がある。そこで、才をひけらかして愚をあらわすことを黔驢の技という。

そうした馬にゆかりのある話を思いおこしながら、中郎は、銘を書いた。銘にいう。

支公の神駿と
武子の馬語とは

麻なることは則ち麻ならん
猶お、孫子荆が齢枝を嚙みしには、勝れり

鋭い皮肉ではあるが、ここにも「顛狂」を欲して「痴花」にとどまるひとの自嘲の氣配が、仄かに見えなくもない

三

少年のころの中郎の目には、皆々として仂く祖母や父の姿と、傍若無人に遊び暮す叔父の少溪の行動との対照が、奇怪なものとして映ったに違いない。そうして、祖母や父が、少溪がそうすることを当然と考えているらしいことに、歯がゆさを感じたに違いない。「少溪袁公墓石銘」には、少年の日に焼きつけられた少溪への感情が、三十年の歳月と、世の辛酸を嚙めて若いた理知とによっても、なおゆるべられることなく、のたうっているのが看取られる。

袁氏の病中、病妻が嫁妻のしもとに堪えたものは　中郎の祖母だけではなかった。左溪の弟松溪の第二夫人鍾氏が、そうであった。中郎の弟小修に「袁母鍾太孺人墓銘」がある。

先王父左溪の弟は松峯公たり。（中略）婦の或いは後れて字み、或いは字ますして、側室の丈

夫の子を生めること各一人なり、また相若たり。わが父を生みし者は余氏の姑たり、わが叔を生みし者は姑たり。その賢また相若たり。先王父は丘を嫡とし、余姑これに事えて、その歓心を得たり。先き叔王父は田を嫡とし、姑これに事えて　またその歓心を得たり。その婉順相若たり。先王父の嫡は久しくその家政を厥い、姑をもって代らしむ。余姑をもって代らしむ。先き叔王父の嫡もまた、久しくその家政を厥い、姑をもって代らしむ。その才相若たり。嫡、晩くして子を生むに、嫡の子に乳すること、その子のごとし。嫡、子無きに、他姫の子に乳すること、その子のごとし。その妬ならざること　相若たり。（中略）ああ、袁子の歎るや、みな賢母ありき。世道日びに降り、強悍嫉妬はすなわち相若たるのみ。風靡え、鷹叱り、鴟梟のみ集するは、嘆すべきなり。……

「艱難辛苦、備さにこれを嘗めぬ」と中郎によって表現せられた事実が、小修においては「その歓心を得たり」と表現せられる。この事実のうけとり方の相違は、多分、ふたりの思想の岐れ目となっているのであろう。だがここでは、まず、袁氏の族の二つの家庭で、同じく庶妻が嫡妻の徴票にあっていたことを知れば足りる。

やや長じて、丘氏と余氏との、田氏と鍾氏との、それからまた士玉と父との、生活の相違が、嫡庶をきびしく差別する封建社会の家族制度に由来することを知ったとき、中郎は、その制度の不合理を痛感したことであろう。

同じ人間でありながら、何ゆえに、庶なるものが嫡なるものに、正統ならざるものが正統なるものに、卑下しなければならないか。なにゆえに正統なるものは、ただ正統であるという理由だけで　正統ならざるものに敬服であり得るのか。

家族制度というものは　親が子を思い、子が親を思う、自然で美わしい感情から　生れたものである。自然で美わしければこそ、孔子のような詩人哲学者が、そこから生れた家族制度の維持・大成・教化につとめたのであり、自然で美わしければこそ、その上に中国三千年の文化の傳統が築かれたのであった。

正統なるものが伝統となるためには、正統のうちに生きた力が働いていなければならぬ。生きた力というものは、自然で美わしい感情を伴うものである。家族制度が正統なものであってしかも傳統となったのは　このような生きた力をそのうちに持ち続けたからであろう。

正統なるものは、しかしながら、傳統となった後に、つねにその正統性をたもちつづけるものとは限らない。傳統は、それが本質的にもつ、持続という性格からして、しばしば正統なるものを固定する。固定された正統は、型となる。型となったものは、多くの場合、生きた力を失って、自然でもなく、美しくもなくなる。すなわち、その正統性を喪失する。

少女の小さな足は可憐で美しい。だが　小さな足の可憐で美しいという正統性が、傳統となり、固定して型となるとき、あのいまわしく醜い纏足が生れる。生れた纏足には　傳統の力が加わって、自然な美わしい足を、逆に醜いものだとして圧迫し、時として逆殺する。

正統性を失った正統は、おのれの正統性を強調する結果、畸型となる。しかもその畸型を正統

と主張するために　かえって正統性をたもつものを逆に異端として排斥する。

傳統というものは、このような矛盾した構造をもつのである。

中郎は袁氏の庶系のひととして、時型の〝正統性〟に壓迫せられる側にあった。彼が伝統に対して疑問をもち、自ら正統と称するものをうらがえしてみようとしはじめたのは　当然であったろう。

中郎が、その家庭からこうした疑問をいだいて社会に飛び立ち、まず觸れた文壇なるものが彼には、おのれの家庭と全く同じであるように見えたろう。当時の明文壇は、さきにも触れたように　前後七子の擬古主義が权威の座に坐って、その正統性を天下におしつけていたのである。中郎がこれに反抗のノロシを挙げたのは当然であったろう。

中郎の前後七子への反抗、いいかえれば、文壇の正統派への挑戦には、いくつかの條件を数えることができるであろう。その條件のいくつかは、すでにすぐれた先達によって指摘せられている。例えば、郭紹虞氏はほぼ次のようにいう。

明代の文学と文学批評には、保守・革新の二潮流があって、中郎は革新的潮流の代表者である。

革新的潮流の形成は、最も基本的には、資本主義が萌芽し、市民階級が新たに勃興したことによるが、特に中郎の文学論に更に直接な関係をもつものには　二つの力があずかっている。文学上の関係からいえば、戯曲小説の発達であり、思想上の関係からいえば、王学左派の発

生である。前者は中郎が徐文長に傾倒したことに、後者は中郎が李卓吾に傾倒したことに、見ることができる。

この説は正しいと考えられる。他の文学文家の指摘も、おおむねこの範囲を出ることはないようである。ところで　右の指摘に對して、更に次の疑問を提出することができるであろう。

それでは　同じこの時代に、戯曲小説に親しみ、かつ徐文長や李卓吾とも交渉のあったひとが他にないではなかったのに　何故に中郎のみが　革新的潮流の代表者となり、その運動をある程度まで成功させ得たか。その革新的エネルギーの源泉は何か。

郭氏の説にしても、管見に入った他の文学文家の説も、中国文学を横範囲にわたって通観し、もしくは概説するものであるから　一人の詩人、ないし一つの文派の消長について繊細な検討を施すことは最初から意図されなかったろう。ただ公安派運動の指頭と挫折には、現代にいたるまでの中国文学における革新運動の指頭と挫折との原型となっているような性格がある。公安派のそれをできるかぎり正確に具体的にとらえておくことは、他の文派についてそうする以上に、はるかに重要な問題であろうと、考える。

さて、中郎の反傳統運動のエネルギーの源泉を、私は次の要約に見出すのである。

1　義父の嫡妻丘氏のもとで艱難辛苦をつぶさになめた庶妻余氏の系列に、中郎が生れたこと。
2　嫡は無為無才であっても奢り、庶はいかにすぐれていても皆々とつとめ続けねばならなかったこと。
3　自分たちの祖母にのみでなく、同族中の庶妻鍾氏にも同じ例を見出したこと。
4　こうした家族制度の中なる正統思想の不合理を、痛切に體験し、これに疑問を抱いたこと。

中郎が、戯曲・小説を好んで読んだことも、徐文長・李卓吾に傾倒したことも、それから、その思想・嗜好においては必ずしも同一ではなかった兄宗道伯修・弟小修が、中郎と共に反傳統の運動に結束したことも、この三人の兄弟がほとんど異常といっていい程に仲がよかったことも、これら公安派成立に欠くことのできない諸條件が、前掲の源泉から流れ出たものであるように、わたくしには推察される。

公安派の運動が、ほとんど保守的潮流を終熄させるかと思わせるほどのはげしいエネルギーをもったのは、彼らの反傳統主義が、単に思想的・文学的思索から生れただけの観念的なものではなく、家庭という人間にとって最も個別的であり、具体的であり、そして原初的である集団における痛切な体験から生れたところに、その原因を見出すことができるのではないであろうか。

『瓶史』において、彼が「幽人韻士」を理想の人間像として描いたのは、幽人韻士が「不争の地に処り一切を天下に譲る」ところに眼を据えたためであった。これこそ、嫡をすてて庶に居すわること、正統を捨てて異端を執ること、に他ならない。嫡であり、正統であることは、天下の

人が争ってこの座に着こうとするものだからである。天下の人が争って着こうとする座を、天下に譲って、不争の地なる奈・果端に処ろうとすることは、価値を転換しようとすることである。中郎にとっての山水花木は、この価値転換のモラルである。滲滲たる波血の事件である。いわゆる風流事などでは毛頭ない。『瓶史』の明るくスマートな外手は、祖々の墳墓にむす苔の匂いを隠すため、ことさらに引きまとった衣にすぎない。

中郎の亜流は、墳墓を捨てて、花をのみ摘もうとする。「暫時快心の事に狃れて常となし、山水の大楽を忘るる」ものである。

この点では一九三〇年代の中国文壇に袁中郎ブームをひき起した林語堂氏の『瓶史』鼓吹も、ついに亜流の域を出ず、かえって、顔嘉成の年譜から「世道に関心」した中郎を抽き出してみせた魯迅[23]の方が、遥かに的確に、中郎文学の秘義を抉えていたということができるであろう。

四

中郎の、姻系家族に対する感情に、弟も著しいものは、憎悪である。しかし憎悪と相反する感情もまた、そこには混じて存する。「少溪袁公墓石銘」を細心に読めば、そう感ぜられる。少溪に対する感情には、かなり複雑なコムプレックスがあるようである。中郎の他の文、たと

次は「徐文長伝」[28]や「醉叟伝」[29]を読み合せると、それがわかるように思われる。ここには「醉叟伝」を引いてみよう。

醉叟はいずれの地の人なるかを知らず。またその姓と字とを云わず。その常に醉えるをもって呼びて醉叟という。歳に一たび剃・髭の間に遊ぶ。七梁冠をかむり、繡せる衣をき、高く潤き杖輔、修き髯、仮れたる腹にて、これを望めば、猶き将軍のごとし。年は五十余ばかりにして、伴侶・弟子なし。手に一つの黄なる竹の笠を提げ、終日酣沈して、白昼寐めるがごとし。百歩の外、猶くさき風、鼻を撲く。巷陌を徧りて酒を索め、頃刻にして十余瓮に飲む。醉えるの態は初のごとし。穀食せず、唯だ蜂松・蜘蛛・蟻蝨および一切の蟲・蟻の類を啖う。市兒驚駭し、争って諸毒を握んで以て供す。毎に直行する時、随って観る者、常に百余人なり。人にこれを侮る者あれば、漫に嘲語を作す。多くその陰しいる事に中る。その人、駭いて反定め。筐の中には常に乾したる蜂蛇数十條を蓄う。これを問えば則ちいわく「天寒きときも酒は得べし。この物は得べからざるなり」と。伯修のわれに告げし時、初めて聞きて伝え云いし者の過ちならんと思えり。召してこれに飲ましむ。童子、毒虫十数種を覓めて進むるに、皆な生のまま、これを啖いぬ。諸もろの小さき虫は、杯中に浸漬すること、雖むしの醯のうちにあるがごとくし、酒とともに呑みぬ。蜂蛇の長さ五六寸なるものは指の禁もて夾み、その鉤を去り、生けるまま口中に置るるに、赤き爪の猩唇とせる昏髭の間に盛伸り見る者の肌も栗みめ。叟は方に得意よげに大いに噛むこと、熊の白・豚の乳のごとし。諸も

ろの味のうち、誰れか住きかと問うに叟いう。「蝎の味は大いに佳けれども、惜しむらくは南の中に得べからず。蚊蚋はこれに次げり。蜘蛛の小さきものも勝れたり。ただ蟻は多くは食ろうべからず。多く食らえば則ち肉ゆ」と。これを食いて何の益ありや、と問うに、いわく「益なし。ただ載れなるのみ」と。後、われと往来すること漸く熟く、宴る夜に、砌の間に踞坐かき、酒を呼めて痛飲す。あるとき客の礼をもてこれをあつこうに、すなわち楽しまず。口に信せて泯りに諱じ、事は怪誕なるもの多し。数十語いうごとに、必ず一二語の微に入るものあり。これを詰えば答えず。再たびこれを詰うに、すなわち佯りて、他顧して対えぬ。ある日、諸もろの舅たちと偕に出で遊び、諱、金　焦の勝れたるに及びぬ。道すがらに叟に値う。二舅、某の年に骨て金山に登りしを云う。叟　笑いていわく、「某家戎の盥酒し、某嘉客の相從えりしに非ざりしか」と。二舅驚愕して、その故を詰うに、答えず。後、人ありて竊かにその篋を窺うに、告身のごときものあるを見る。あるひと云う。「彼の中方戸たり」と。理わりまたかかることありしならん。叟の蹤跡怪異にして、居止に所なし。晩は、古廟あるいは曠闊の軒下に宿す。口中に常に「方法は一に飯す。一に飯するは何れの処ぞ」と揆う。凡そ行住坐眠及び対談の時、皆なこの二語を呼ぶ。その故を詢うものあるに、叟は終に対えず。往にわれ、郡に赴きし時、なおこれを沙市に見たりき。今、何所に在るかを知らず。

石公いわく「われ市肆の間において異れる人を見るごとに、その蹤跡を得ざるを恨む。因って嘆ず、『山林幾室、異れる人の宅宅するところ、市肆に見わるるもの、十に一のみ。史冊

に記すところ、稗官の書するところに至っては、また市肆の十に一なるに過ぎず。その人すでに自ら見わるる心なし。ともに遊ぶところはまた屠沽・市販・遊僧・乞食の輩なり。賢士大夫の知りてこれを伝うるもの、幾何ぞ』と。われ往に聞く『澧州に冠仙姑と一瓢道人とあり』と。近日、武溪の間に数人あり、行事また尠なり。一人、道を知るに類する者あり。ああ、豈に、いわゆる龍徳あって隠なる者か。

この醉叟は、中道の編述した「柞林紀譚」にえがく柞林叟と同じひとのようである。そうして柞林叟は、李卓吾をモデルとするものであるらしい。だが、さしあたってここでは、醉叟なるものの行動と、少溪のそれとの間にある、いくつかの類似点に目をとめれば足りる。

ここには蒼々として仍く士郎の祖母余氏、父七沃とは全く別の世界がある。おのれの欲するところをそのままに行動して、いささかも他にはばからぬ自由な風手がある。醉叟に者ようとした「龍徳」を、中郎は、少溪には許していない。けれども行事の「怪誕」な点では同じであろう。中郎が『疏史』に描く決烈たる隠者とは、なんのためらいもなく耽溺しうる人であった。少溪こそ、その耽溺しうる人ではないか。少溪をただ憎悪するだけの中郎ならば、恐らく李卓吾や徐文長のようなタイプの人には反撥を覚えるであろうと察せられるのに、かえって強くひきつけられている。

少年時代の中郎は、祖母余氏・父七沃の勤苦するすがたと、少溪の放蕩たる日々とを較べて、少溪に苦々しい感情を抱いたであろうが、一方では、その自在な、一種男性的な豪放さ、ひかれ

祖母らの生活に、じれったさ　おきたりなさを感じていたのであろう。丁度、繊細な心情をもつひとも、少年時代には、為実な父母の市民生活によりは、荒唐な岩見重太郎や三好清海入道の行状にあこがれることがあるように。

嫡なるもの　正統なるもののシムボル少溪に抵抗して　異端・隠者の道を追究してゆくと、道の行く手に立つ異端・隠者が、少溪と相似た風丰の人であることを見出したとき、中郎は戸惑いを感じなかったであろうか。

中郎のうちには　余氏の血によってゆるべられた袁氏の「武勇」が、丘氏の血によって悔められた袁氏の「武勇」を、憎みつつ慕う矛盾がある。この矛盾は、中郎のように聰慧なひとには、少なからぬ苦痛をもたらしたに違いない。

この矛盾打開こそ、中郎の方向を決定するであろう。彼は、いかなる方向に　打開の道を見出そうとするのであろうか。

五

左溪が死に　その嫡男の少溪に家政をとる意志がないので、庶出の七沢がその責を負うことになった。七沢は少年ながら、それを決意したであろう。だが、七沢の母の余氏には別の考えがあった。

亡夫が生前、子弟に章句を授けたのは、余氏を単に経済的にゆたかならしめようとするのみでなく、世に名あらしめたいと念じたからに違いない。そのためには子どもたちを官界に出さねばならぬ。痴男がそうしてくれれば、亡夫への手向けとしては一番だが、少溪にはとうていその才もない。とすれば、七沢に等子の業すなわち高等文官試験の受験勉強をさせねばならぬ。

余氏は、こう考えて、家計についての仕事はみずからとりしきり、七沢には学業に専心させることに決めた。

七沢は才能もあり、つとめもしたから、諸生に送ばれはした。だが進士に登第しなかったのは、やはり、衰えた家計と母の辛労への顧慮が大きかったからではなかったか。なお余氏が中郎に語ったことばから察すると、七沢の性格には、黄鐘の門をくぐることをいさぎよしとしないところがあったようである。これもまた、彼を官界に送るをはばんだ一因であったろうかと推測される。

ただし、七沢に人を見る明がなかったわけではない。彼が友に送んだのは、すでに諸生となっていた同邑の龔方伯であった。方伯の詳は詳かにしないが、春所と号し、七沢より三十三歳長じ、当時極めて貧困であった。七沢は方伯を招いて共に読書し、肝胆相照した。方伯は後に進士に登第し、官は河南左轄に至った。方伯の女子が七沢の夫人であり、中郎らの生母である。

人間の性格形成に、父系がはたす遺伝的要素よりも、母系のそれが有力である、との説を、近ごろ曾見したことがある。その当否は門外のわたくしの知るところではないが、中郎について、いえば、この説は参考とするに足るようである。ただ、龔氏については、父系についてほど豊

富な資料の存しないことをあらかじめ断っておかねばならない。

[illegible]奇の龔氏は中郎の文坂のときに死んでいるので、中郎も小倩も、母についてはほとんど記憶するところがなかったようである。従って記すところもなかったのであろう。幸い、中郎に、龔氏の末弟仲慶惟長とその夫人のために撰した「兵部車駕員外郎龔公安人陳氏合葬墓石銘」がのこっている。そこに描かれた惟長の人間像を見つめることによって、中郎の文学に与えた母系の性格を推察することは、必ずしも困難なことではないであろう。ことに、惟長は叔父とはいいながら、中郎らとの交情においては、むしろ親友というに近く、互に影響を相投じたのであるから、ここにその墓石銘を紹介しておくことは無益ではないであろう。

公は性命を精研し　晩に至って乃ち釈氏に通じ、筆血せざること三年なり。高才博学、書において競わざるところなし。毎に異典を得れば、みずから讐校し、書を蓄うること万余軸に至る。邑の人士の稍や古を慕うを知ることは、公と、兄にしていまはなき太原の力なり。

中郎が王学左派と呼ばれるに至ったことは、惟長が性命を精研したことと、関わるところがあるであろう。惟長が、晩年心を仏道に寄せたのは、中郎兄弟の先導にまったのである。書を蓄えることは、財を蓄えるより、はるかに難い。洪水のように出版される現代のわが国においても個人の蔵書に一万冊をかぞえられることは多くないであろう。更に稿本を得て自ら校讐するというに至っては、よほど学に篤くなければできることではない。惟長はそれをなしたのである。

けれども多分、蒐集・校書の慣習は、単に惟長一人の篤学によるのみではなく、その父方伯以来藝氏の家につちかわれて来たものであったろう。財の存するところには、招かずして商賈が往来するように、書の存するところには、おのずから文人墨客が集う。かくして、公安の人士が「古を慕うことを知る」に至るのであった。惟長の亡兄惟学を「太原」とよぶのは、そこが彼の官吏としての最後の任地であったにちなむのである。

性は寡黙にして、人の過ちを談るを恥ず。人に械を挾みて公を弄する者あるに、公は佯りてこれに墮つるがごとくす。しかも実は了了なりしなり。後に公に負くことありと雖も、公もまた竟に発かんとはせざりき

からくりに掛けてやろうとするものがあると、それと知りながら、はまってやる。恩を仇でかえすようなものがあっても、その旧怨をあばくようなことはしなかった。

古の図書と鐘鼎とを好み、五畝の宅は花竹もて半ばを占む。怪石と枯松と几榻の間に累累たり。亭臺軒榭、小や竟に當わざれば、輒ちに毀ち去り、日を踰えて更に作る。疏題いまだ竟えざるに榱桷すでに移る。公は竟にかくのごときをもって貪し。然れども、公は心に貧とめざりき。

図書・錦鳥・花竹を好むことは文人には珍らしいことではない。ただ惟長の場合は、その住居が「五畝の宅」である。『孟子』に見えることばで、貧農の住む小さな家を指す。陸軍省運輸部付の高等官が、そういう小さな家に住み、その家も半分は花木緑竹が占領し、それでも足らずに机や椅子のまわりにも奇怪なかっこうの石や、枯れたような松が、うずだかい。

人の過ちに対しては甚だ心の寛やかなこの人が、物に対する好みとなると、うってかわって厳しい。あずまやでも、おばしまでも、ほんの少しでも氣に入らないとなると、すぐこわして、作りなおす。たかきのかざりが完成しないうちに、たるきそのものがよそに移されている。

嘗て河北より使して還るに　道上に柳條の嫋嫋たるを見る。公愛してやまず。役夫を呼びて数枝を伐り、轅の旁に縛置せしむ。これを問えばすなわちいわく、江南にはかくも倖き柳なし、持ち帰りてこれを樹えん」と。聞く者、匿び笑いす。家に至るに及び、僅かに枯れ枝の数條を得たるのみ。公なお水の辺に置かしむ。その稚致の高遠なること皆この類なり。嘻かかることは齷齪たる俗児とともに道うべけんや。政使の道もまたまさに解せられざるべし。

柳枝の嫋々たる姿を愛するがゆえに、その枯枝を捨てるに忍びず、万一つきもするかと水辺におく心情は、たしかに、きいた風なことを云いたがる連中になっとくされるはずはない。その心情をもってする惟長の官吏としての行動が、世の人に理解されがたかったとしても、当然であったろう。

公は晩歳、余と最も契(かな)えり。云うべきところのものは公の粗述にして、公の自得せし処に至っては、公といえども言う能わざるなり。

惟長はその晩年わたくしともっとも意氣投合した。そのわたくしにしても、惟長の行状心情について、ことばに表現しうるようなものは、彼のおおよそな行状心情にすぎない。彼が到達したデリケイトな境地にいたっては、彼自身すら、それを意識的には表現することはできなかった。

公、諱は仲慶、字は惟長、方伯公の季子にして、太原の令の弟なり。母は趙夫人という。嘉靖庚戌の歳に生れ、万暦己卯に郷に挙げられ名は才三、時に、いまはなき兄の宗道の才八なりしかば、里中、もって美譚となしぬ。庚辰に進士となり、行人を授けられ、乙酉に福建道の御史に改められしに、甫(はじめ)かに再月にして、出でて磁州の判となりぬ。疏をもって权党を論じければなり。いまだ幾ばくもなくして汝寧の推官となり　丁亥に南戸部主事、戊子に兵部車駕司員外郎に調せらる。

嘉靖庚戌は二十九年(一五九〇)である。万暦己卯は七年(一五七九)である。この年、出身の地方で行われる才一次高等文官試験に、才三位の成績で合格した。三十歳であった。同時に受験した中郎の兄の伯修は才八位で合格した。二十歳であった。同族から二名も優秀な合格者を出したので評判になった。翌八年、惟長は才二次試験にパスして進士となり、官界に入り、政府部内の党争について

上疏して論じたため左遷されたことが一度はあったが、その他は順調に進み、十六年に兵部卿寮同員外郎になった。

しばらくして、内報をもって返る。既にして方伯公もまた卒しぬ。公遂に経世の意なく、自ら遯庵居士と号し、角巾散帯の朋、赤髭白足の侶と、茂樹に優游し、暗言して日を終うること十余年、竟に坐脱するが若くにして以て去りぬ。世務僅かに五十三なりと雖も、然れども指を弾いて石を払うと　公において何の別かあらん。公の学は何の学なりしや。

母趙夫人の死に会って飯休した惟長は、つづいて父方伯の死を迎えねばならなかった。万曆二十四年（一五九六）のことである。彼には、もはや官吏としての生活をつづける気持はなくなっていた。そのまま退官して、遯庵と号し、文人・僧侶を友として、悠々自適十数年、古の名僧のように、坐ったまま示寂した。五十三歳の若さだったが、彼にとっては、生から死への移りゆきは　石上の壺を払うのとどれだけの違いがあったろう。生死の達観、これこそ惟長の学問だったのだから。

惟長は官にありながら俗を離れた人であった。晩年には退隠したが、それは、李卓吾の刻しさはもたない。惟長のこの暢びやかな性格は、多分その姉龔氏にもあったろう。龔氏の性格は、中郎の性格形成にもかなり大きな巾を占めるであろう。丘氏的なものと余氏的なものとの烈しい相剋になやむ中郎が、この矛盾を解こうとして歩む方向には、龔氏的なものが見られなくはないだ

ろうか。

「瓶花」は、中郎が龔氏的な方向に見出した、彼の矛盾解決の一つの態度であったように、わたくしには、感ぜられる。

（一九五七・八・六）

註

1 ……近又著餅史十三篇餅史者記餅花之目與說如陸羽茶經悉與牡丹志之類……（萬曆三十六年冬匆吳袁叔度書種堂刊『瓶花齋集』（清写本以下『吳本瓶花』と略称）巻一の二葉一二。『袁宏道元著』）

2 夫幽人韻士屏絶聲色其嗜好不得不鍾于山水花竹夫山水花竹者名之所不在奔競之所不至也天下之人擾止于覊羈利藪目眯塵沙心疲計算欲有之而有所不暇故幽人韻士得以乘閒而躋爲一日之有夫幽人韻士者處於不爭之地而以一切讓天下之人者也惟夫山水花竹欲以讓人而人未必樂受故之世安而躋之也無禍嗟夫此隱者之事決裂大夫之所爲余生平企羨而不可必得者也幸而身居隱見之閒世閒可嬉可爭者既不到余遂欲敝笠高屐濯纓流水又爲罕官所絆便有栽花種竹一事可以自樂而邱居湫隘遷徙無常不得已乃以膳瓶貯花隨時換換京師人家所有名卉一旦遂爲余案頭物無扞剔澆頓之苦而有味賞之樂取者不會過者不尋是可述也噫此數時快心事也無狐以爲常而忘山水之大樂石公記之凡瓶

中所有品目條列於後與諸好事而食者共焉

「決烈」は『鍾伯敬增定袁中郎全集』（以下『鍾本』と略称）所收『瓶史』巻一、二、「瓶花引」（以下『周本』と略称）では『明本』と略称したが、他の明本と区別するため本稿以下『鍾本』と略称する。巻一五、巻一七、巻一八　日本僧元政覆刻『梨雲館類定袁中郎全集』（以下『元政本』と略称する。巻一七、巻一八には「決烈」とし、中国図書館版『袁中郎全集』（以下『図本』と略称）『隨筆』頁二二には「非烈」とする。「決烈」がいい。

「戮」は、他本にはみな「曹」とする。「戮」はあやまりである。

『京都女子大學紀要』（文学）巻一一。

中郎には「與友人論時文」（鍾本巻二、巻六、七）、「陝西鄉試錄序」（鍾本巻二、巻二六―二八）などの科挙の文について論じた文章がある。今日の上級学校入学試験者が希望校の出題傾向をさぐるに熱狂するように否、それ以上に、当時の応挙者は、試験官の傾向に敏感であったろう。

「去吳之七牘」（鍾本巻一九）「告病疏」（鍾本巻五、巻九）

『解脱集』はこの時期の作品集で遍歴した山水の遊記・詩文を含む。

「告病疏」（鍾本巻五、巻九）

羅大經『鶴林玉露』巻七。

LIN YUTANG, The Importance of Living, New York 1937.

「余大家祔葬墓石記」（鍾本巻一、巻一）　袁中道「石浦先生傳」（携霞閣刊『珂雪斎近集』下、頁四四）　袁憲健「重刻先大夫中郎公詩文全集序略」（以下「序略」と略称）巻一（袁憲健重編『梨雲館類定袁中郎先生全集』（以下『憲本』と略称）巻末）

「余大家祔葬墓石記」

「石浦先生傳」

13 「余大家祔葬墓石銘」

14 「余大家祔葬墓石銘」「石浦先生傳」二つの記述には峡互する部分がある。

15 「余大家祔葬墓石銘」

16

17

18 「余大家祔葬墓石銘」「管大家壙記銘」（鐘本巻一八、葉五）「舒大家誌石銘」（鐘本巻一八、葉一四）

19 鐘本巻一八、葉四、五。原文は左の通り。

叔少溪公諱士玉與余父封公同出王父左溪公而母別七歳失家母丘母於封公母余大家弱好弄挾瓦注走開酒後耳熱出所彈雀炙之遊啖諸年少王父愛憐之不之禁十五歳孤封公止長一歳任家政而公嬉狹他本作俠是如故性嗜馬奪中皆良駒縣高貲不肯吝不致遠但日馳湖莽間風鬣霧鬣望若龍種觀其蹴蹈嚮聲驕嘶鼻語以爲快未雞鳴輒起掃沐衣冠而立庭中命藏獲牽駒出然松而照之視其饑飽芻秣而後放晚則從山頭望歸塵掀齒而笑爲人魁碩長悍壯飲食日携拔軍偏提五木挾諸客走馬雙田孟溪間劇飲徹晝夜四十年如一日未嘗一刻奔走公私作人間勞薪事也公生於嘉靖甲辰享年六十子四人孫十一人以癸卯十一月二十日附葬鳳山之原分丘姑之鬣而封之左則先王父與余大姑也將終以銘屬余姪宏道乃揮管歔欷而爲之銘　銘曰安公神駿武子馬語疝則麻矣猶勝孫子荊之嗜黔技

20 「石浦先生傳」

21 鐘本巻一八、葉二。引用した部分の原文は左の通り。

大姑生於邑之先主管爲正德之乙亥歳十月廿長而歸於表嫡姑丘歳栗顯蘇辛廷備嘗之矣大姑怡然不色忤也戊戌舉長姑巳亥丘亦舉二姑甫數月耳舉長姑乳乳之癸卯舉余父甲辰丘亦舉余叔甫數月耳舉余父乳乳之夜戊丘大姑卒王父委之家政撫二孩絶痛歸二姑也先於長倍其資二姑所歸家儒而貧姑資

給之十餘年後二姑病姑念之至絶食一日晨起有烏投姑懷宛轉而死姑恸哭未絶聲而訃至其至性如之

22 劉義慶『世說新語』巻三。

23 同、巻一四。

24 同、巻一七、三。

25 柳宗元『河東先生集』巻一九「三戒」。

26 『珂雪齋近集』下、頁八三、八四。

27 『中國文學批評史』（一九五五年・新文豐出版社）頁三六五。同書の中郎と公安派についての意見は丁寧深切で傾聽すべきものが多いと思われる。

28 例えば、梅國楨客生。

29 魯迅『且介亭雜文二集』（一九五一年・北京重印）頁一六―一八『招貼即扯』

30 呉本施花、巻七、葉一―三。

31 同、巻七、葉四―六。原文は左の通り。

醉叟者不知何地人亦不言其姓字以其常醉呼曰醉叟歲一逆荆澧間冠七梁冠衣繡衣高檐凋輔修髯侵服袋之如悍將軍年可五十餘無伴侶帶子手提一黃竹籃盡日酣沉白晝如寐百步之外糟風逆鼻偏巷陌索酒頃刻飲十餘家醉態如初不穀食唯啖蜈蚣蜘蛛蝎蝦蟆及一切虫蟻之類市兒爲驗爭握諸毒以供每遊行時隨而觀者常百餘人人有怪之者漫作數語多中其陰爭其人驗而反走籃中嘗畜乾蜈蚣數十條問之則曰天寒酒可得此物不可得也伯修予告時初聞以爲傳言者過色而飲之壹子覓寺虫十餘種進皆生飲之諸小虫浸漬杯中如雜在醯與酒俱盡蜈蚣長五六寸者夾以指葉去其鉗生置口中赤爪攫撥蹈伸吾

髭間見者肌栗叟方得意大呰如食熊白豚乳也問諸味熟佳叟曰蝸味大佳惜南中不可得蝗蚱次之蜘蛛小者勝獨蟻不可多食食則多悶問食之有何益曰無益直戲耳後與余往来漸熟每来踞坐砌間呼酒肩飲或以客禮禮之即不樂信口浪譯事多怪誕每數十語必有一二語入微者詰之不答再詰之即佯以他辭對一日偕諸舅出遊鼓及金焦之勝道值叟二舅言某年曾登金山叟笑曰得非某年我置酒某某客相從乎二舅驚愕詰其故不答後有人竊窺其篋見有若告身者或云曾為故中萬戶理亦有之叟踪跡怪異居止無所晚宿古廟或閣閣簷下口中常持萬法歸一一縣何處凡行住坐眠及對談之時皆呼此二語有詢其故者叟終不對往余赴部時猶見之沙市今不知在何所矣　石公曰余於市肆間每見異人恨不得其踪跡因嘆山林叢藪異人之所窟宅則于市肆者十一耳至於史冊所記稗官所書又不過市肆之十一其人既無自見之心所與遊又皆屠沽市販遊僧乞食之輩賢士大夫知而傳之者幾何住間澧州有冠仙姑及一瓢道人近日武溪之間有數人行事亦怪有一人類知道者竟豈所謂龍德而隱者哉

32 客筆祖「李卓吾評傳」（民国二十六年　商務印書館　頁二七。）

33 34 「余大姑祔葬墓石記」

35 ここには「叅大家墳記銘」の有大歳即失母時中道第方四歳とあるに対し「たが」「余大姑祔葬墓石記」には歳乙亥余母卒とあり乙亥歳には中郎八歳中道六歳である。憲本巻一に附載する「袁中郎先生傳」にも母卒公八歳とする。

36 鍾本巻一八、葉一一～一四。引用した部分の原文は左の通りである。

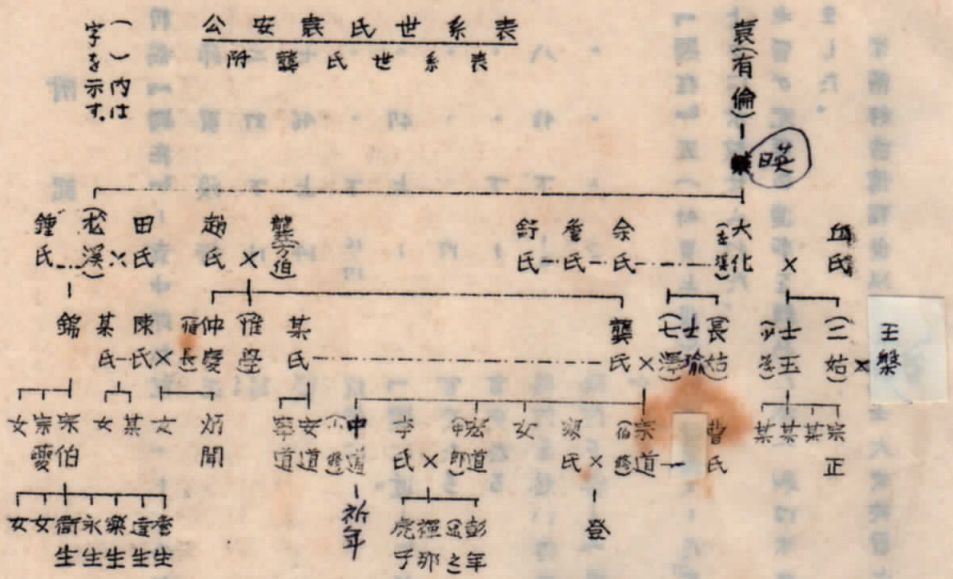
公精研性命至晚乃通程氏不筆血者三年高士懸學於無所不窺每得異與躬自粤校舊書至萬餘軸邑人士稍知蒐古者公與兄先太原之力也性寬厚恥談人過人有扶持以弄公者公佯若匿之而實了了後雖負

※中道の探した「春大姑五十序」（珂雪斎近集）に「少以失母……予已四歳余」とあるところからみれば「叅大家墳記銘」の記述が正しいのとしてよいであろう。

公公亦竟不發好古圖畫及鐘鼎五畝之宅花竹居半植石枯松纍纍几席間亭臺軒榭小不當意輒毀去踰日更作疏廣未竟樓棟已移公竟以此貧然公不屑也嘗從河北使還見道上柳條嫋嫋公愛不已呼役夫伐數枝縛置輿傍問之則曰江南無此佳柳持歸樹之問者匿笑又至京僅得枯株數條而已公猶令置水邊其語致高遠皆此類噫此可與醒俗兒道耶政使道亦當不解也公晚歲與余最契所可言者公之狂迹至公之自得處雖公不能言也公諱仲慶字惟長方伯公季子而太原令之弟也母曰趙夫人生嘉靖庚戌歲萬曆己卯舉於鄉名第三時先兄宗道第八里中以為美譚庚辰成進士授行人乙酉改福建道御史甫再月出為磁州判以疏論權黨也未幾歷次寧推官丁亥轉南戶部主事戊子調兵部車駕司員外郎頃之以內艱歸既而方伯公亦卒公遂與經世志由稱遯菴居士約中散嵇之朋亦號白足之侶優游於樹間言終日者十餘年竟若坐脫以去雖世壽僅五十三然遊指拂石於公何別公之學何學也哉

表系世氏袁安公

附表系世氏龔



附記　つづき　(40頁から)

禮部員外郎數遍白簡返去一日以書抵公訴其罪落且言學宣百指行至陳留獨得一舟如許大遂盡一艘於行間魯公笑焉蔡條得是卷而藏之毛晉が之を何處から採ったか今検べる暇がありませんが不敢取　昭30　10　4

毛晉の記事に蔡條とあるので鐵圍山叢談を閲たら果してありました。蔡條得是卷而藏之は晉の語でした。　昭30　10・7

3右示教せられた兩先生、高評を賜わった諸先達資料の閲讀に便宜を與えられた龍谷大學圖書館並びに京大人文科學研究所に　それぞれ深く感謝したい。

附記

1 前稿『顕狂』一表中部私記――の文中左の個處を訂正する。

節	頁	段	行		備考
二	37	下	11	近	吉川幸次郎博士示教 昭30・12・26
				駕	
七	46	上	14	襲	
〃	〃	下	16・17	拔擢に	
〃	47	上	1	「顕に近し」と	
〃	〃	〃	17	官吏たる	
〃	〃	下	1	官吏たる	
八	48	下	1・2	幾何を愁い得ず	
〃	〃	〃	2	幾何を樂しみ得ん	

拔擢吏として
「顕に近し」と
吏たる
吏たる
幾何を得ざるを愁い　吉川博士示教
幾何を得たるを樂し　吉川博士示教
むや

2 『顕狂』五（44頁上段）に不詳とした米芾が書中に畫いた船について小林太市郎教授から次のように示教せられた。

老晉が元章の遺事を輯めた本（題は米元章とのみあります）をあけてみたら左の記事がありました。

米芾好古博雅世以其不爲士大夫共目之曰米顕業魯公深喜之嘗爲書畫學博士後選（以下39頁へ）